

『訴歌』は重い言葉で綴られ、しばし、目が離せない。読むのに多くの時間を要した。心に刺さった一行詩をもう一頁書きたい。

「父母の死目に遭わぬそれのみがわれが親への孝なりとおもふ（原田樫子）」ハンセン病者は、親の死に目に遭わないことが孝行であると言う。こんな残酷なことがあっていいのか。「癩予防法の厳しき掟解かれたり灰となりたる君の白骨（汲田冬峰）」死んで、白骨の灰になった時に、ようやく過酷な「らい予防法」から解放される。

「新患を励ます嘘が見あたらず（宮田竹坊）」新しい患者として、入園して来る人がいる。彼らは失意のどん底にある。その彼らを励ます言葉がない。「退院をせる人人の名を挙げて新入患者をいたわる君は（三浦一滴）」三浦氏は、直って退所した人がいるよと、懸命にいたわる友がいると歌う。幼い新患の場合、なおさら苦しかろう。

「戦ひより還り来ざりし二百万誰が為に死ににゆきしかと思ふ（横山石鳥）」戦争に関する歌もある。横山氏は、多くの戦死者を出したが、誰のため、何のための戦争だったのかと問う。「天皇はなぜに腹切らぬと憤りき砂入りの白木の箱母は受けとりて（沢田五郎）」沢田氏は、母は遺骨のない、砂が入った白木の箱を受け取ったが、天皇のために死ぬと命じた天皇は責任を取って、なぜ腹を切らないのかといぶかっている。

「名無し草倒れたまに花を付け（青葉香歩）」草花は風に吹かれて倒れていても、花を咲かせる。青葉氏は、その名の通り、青葉の自分も花を咲かせるぞと言っているようだ。

「その時はその時ですと妻笑い（園井敬一郎）」園井氏の妻は、死ぬ時が来れば、その時に応じますよと笑い飛ばしている。苦悩が生み出した達観であろう。

「断種手術の通知書の中に妻と我が顔合せ坐し言葉出でざり（村井葦己）」療養所では出産が認められていなかった。断種手術の通知書を前に、夫婦はただ黙している。ハンセン病者が懐妊すれば、墮胎させられた。彼等には人権が全くなかったのである。

「予防法解け潮にのまれし幾百の友のみたまの慰（い）ぶす記念碑（永井静夫）」島の療養所から、家族に会いに行きたいと海を泳いで逃げ出した。しかし、潮にのまれて溺死した。その数が数百であるという。「人権を叫んで渡る瀬戸の島（天地聖一）」橋が付けられ、「人権」と叫びながら、橋で本土に渡れる自由を得たと天地氏は喜ぶ。

「癩治療薬プロミン予算を獲得すべく吹雪猛（たけ）るあさ断食祈祷に入る（長谷川史郎）」療養所では、待遇の改善を求めてしばしば断食して抗議することがあった。長谷川氏は、プロミンを獲得する予算を確保してくれと、吹雪の朝、断食祈祷に入ったと歌う。

「麻痺し果て皮膚こぼれ落つるわが足を面会の妻洗ひてくれぬ（多山良一）」妻は感染しないことを知って、ハンセン病で傷ついた夫の足を洗ったのか。自分も感染して、療養所で夫と共に暮らしたいと願っての洗足なのか。多山氏にとって妻は天使である。

「ふるさとの井戸の水にて顔洗う四十五年の涙を洗ふ（森岡康行）」、「後遺症深く残れど誇らまし四十年費やして癒えたるわれぞ（松永不二子）」二人はプロミンによって、回復したのであろう。万感の喜びが伝わってくる。

「何時の世も芥の族（やから）にされて来し癩者の清き叫びをぞきけ（新谿生雄）」新谿氏は、塵芥のように扱われてきたが、我らの清き叫びを聞けと叫ぶ。「一様に大きな陽あたる社会欲し『らい病みまして』公然と言へる（永井静夫）」「私はらいを病んでいた」と公然と言える社会になって欲しいと訴えている。これらの訴えを謙虚に聞きたい。